

## 「役に立たない」至福の贈り物



「アブローズ(鳴采)」という名前のブルーローズ、100本

贈り物つて難しいですね。とりわけ文化が違うとせつかくの好意もかえつてあだになりかねません。私にも失敗があります。ある年配の方にささやかなお礼のつもりでハンカチを贈ったところ、複雑な顔をされました。ハンカチは手巾(てぎれ)と書きますが、手切れを連想させ、「あなたとはこれっきり」という意味に受け取られることもある、と知ったのはその後のことでした。

また、お世話になったアラファイフの女性に、アンチエイジング(抗老化)成分が売りの美容食品を贈ったことがあります。

やや高価なもので、美容に関心の高い彼女には喜んでもらえると思ったのですが、それが間違い。「私が老化のことを考えるように見える? そんなに老けて見えていたなんてショック」と気分を害されました。ああ、そういう心理まで考えるべきだったのに、私はなんと「人」を見ていなかったのか、と激しく後悔しました。

そんなこんなで恥ずかしい失敗を重ねて獲得した、私なりの贈り物のルールがあります。それは、「相手の生活に役立ちそう」という自分勝手な憶測を持

ち込まない、ということです。お中元やお歳暮に贈答されがちなビールやかつお節やそうめんセットなど、日用品として邪魔にならない定番品はたしかに悪くないでしょう。無難ではあります。ただこれだって、相手を見ずに贈ってしまうと、その人にとっては同じ物がかぶり、誰から何を贈られたのかという記憶にすら残らないということがあります。相手の記憶に残りたくないときはまさにうってつけなのですが(笑)、贈り物を心のメッセージと考えた時には少し弱い。まったく、「役に立ちそう」という基準ほど役に立たないものはない、というのが私の実感です。

翻って、自分が贈り物をもろう立場に立った時、何がうれしかったかと考えてみるに、真っ先に思い浮かぶのは、まったく実生活の役に立たないものばかりでした。

たとえば、「夢かなう」という花言葉をもつパープルブルーのバラ100本。抱えきれず、持ち帰るのに家族にSOSを出したいへんな思いをしましたし、花瓶も足りないで大急ぎで買いに走ったりと、生活の役に立つどころではなかったのですが、数年経った今なお受け取った当時の至福感を思い出します。

最近では、海外旅行ができないこの時

期に、スーツケース。しばらくは使う機会がないどころか、家に置いておくと場所をとるので、役に立つどころではありません。でも見るたびに海外旅行の妄想が広がり、ワクワクした高揚感を与えてもらっているのです。実際に使うことができないう時期をあえて贈るタイミングとする、というセンスにも脱帽します。

そのような達人からは、予想外の驚きと感動こそ贈り物の極意だと教えられるのですが、いざ自分が人を喜ばせようとする、悩み過ぎて機を逃したり、狙いすぎて外したりと、試行錯誤の連続です。自分の勝手な思い込みではなく、相手のことを注意深く観察して、適切なタイミングに驚きと感動をプレゼントし、関係をよりあたためたいものにする。そんなギフトのセンスは、ファッションセンスと通底することに気づきます。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「『イノベーター』で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。